

琉球語、上代日本語と周辺の諸言語

——再構と接点の諸問題

はじめに

現在では、琉球語と日本語が姉妹言語であるということを疑う言語学者はいないであろう。しかし、最近日本祖語、琉球祖語と日琉祖語の再構が進んだとはいえ、まだ不明な箇所が少なからず残っている。特に、日本語にない琉球語の特別な語彙と文法要素、また、琉球語にない日本語の特別な語彙と文法要素が目立つ。それ以外にも、同源の様でも実際に説明に問題がある語彙と文法要素も少なくない。この論文では、そうしたいくつかの語彙を取り上げる。

一、琉球祖語 **mia*「土」と上代中央日本語 opomyitakara ~ oponutakara「百姓」

琉球祖語 **mia*「土」と上代日本語の *wi*「土」は異なる語源を

アレキサンダー・ヴォヴィン

持つ言葉である。こういう場合、どちらが日琉祖語に遡るかという問題になる。上代東国日本語をある程度継承する八丈島方言には *mizya*「土」という言葉がある。八丈島方言の *mizya*「土」は琉球の久米島方言の *mica*、喜如嘉方言の *mica*、伊是名方言・瀬底方言 *neca*、前島方言 *neca* など（内間・新垣二〇〇〇：四二〇）のように、口蓋化により **mia* から発達した形式に違いない。従って、八丈島方言の *mizya*「土」を考慮すると、**mia*の方が日琉祖語に遡る可能性が高い。では、上代日本語の *wi*「土」はどう説明すればいいのか。上代日本語の *wi*「土」は、私が以前にも指摘したように、確かに上代韓国語の **tule*「土」（中世韓国語 *twūlen*, *twūtlk*「岸、土手」、*twūlcwūy*, *twūlcwūy*「モツラ」へ *twūlé* +「土」*cwūy* 鼠）参照）からの借用語である（Yovin 2007a: 355-57), (Yovin 2008c: 117-18)。ここでもう少し **mia* が日琉祖語に遡る事を支持する証拠を見てみ

よう。例えば⁽¹⁾、上代出雲日本語に *nia* ~ *nuta* 「湿地」という言葉があるが(出雲風 一六八・九一〇)⁽²⁾ /mi/~/ni/ の口蓋化により **nita* ~ *nita* という変化は当然であろう。*nuta* という形式は一見説明が困難そうであるが、こちらは後で解説する。現代本土方言にも *nita* ~ *nuta* ~ *nota* 「湿地」という言葉が見られる(澤瀉 一九六七・五四五)⁽³⁾。また、上代中央日本語に *ni* 「土」という言葉があるが、**nita* ~ *nita* の *-a* は説明できない形態素であるから、こちらは **nita* ~ *nita* に関係があるとは言えない。従って、*ni* 「土」は **nita* ~ *nita* と異なる語源を持つている可能性が非常に高いと思われる。

しかし、上代中央日本語にも **nita* の名残が見られると思う。上代中央日本語には *opomyitakara* ~ *opomutakara* 「百姓、人民、公民」という言葉がある。この言葉の伝統的な分析は「大御宝」である(澤瀉 一九六七・二六二)。しかし、その分析には多くの問題点がある。

(イ) 奈良時代の文献における「大御」の使い方は神・天皇自身と神・天皇家に關係が有る言葉・詔・身体の部分・使う物・属する物などのような場合に限られている。たとえば『古事記』の例を見ると、大御羹(記下・三ウ八)⁽⁴⁾、大御饗(記中・一オ八)、大御歌(記下・二九オ五)、大御面(記中・二八ウ九)、大御神(記上・一五ウ六・八)、大御酒・意富美岐(記中・五五オ七、六二オ五)などがあ

る。この観点から見ると、百姓に「大御」を使うのは不可解である。(ロ) 私が知る限り、*opomyitakara* ~ *opomutakara* 「百姓、人民、公民」の万葉仮名の音声表記の例は上代日本語の文献には全く見られず、「百姓、人民、公民」に後世加えられた振り仮名「オホミタカラ」の例しかない。しかし、「大御」は平安時代末期以前「オホミ」であり、上代日本語ではまだ「おほん」に変わっていない。平安時代初期の辞書である『倭名類聚抄』に初めて現れる音声表記「於保无太加良」は /nu/~/z/ の変化以前の例であるため、*opomutakara* と読むのが妥当であろう。しかし、私の知る限り、「大御」は平安時代末期まで「おほむ」または「おほん」には成らないのである。

(ハ) 残念ながら、*opomyitakara* ~ *opomutakara* 「百姓、人民、公民」の上代アクセントは記録されていないが、『類聚名義抄』に出る *opomutakara* 「人民」のアクセントは低低高高高(○○●●●)である(望月一九七四・二二五)。しかし、*takara* 「宝」のアクセントは低低低(○○○)または低低X(○○x)(望月一九七四・三〇二-三〇三)である。従って、アクセントの面から分析すると、*opomyitakara* ~ *opomutakara* 「百姓、人民、公民」を「大御宝」^(おほみたから)として解釈するのは困難であろう。

上述の点を考慮に入れた私の *opomyitakara* ~ *opomutakara* 「百姓、人民、公民」の解釈は「大—土—族」^(おほ—みた—から)である。カラ「族」のア

クセントは高低(●○)であるから、*oponutakara*「人民」のアクセントである低低高高高(○○●●●●)とよく一致する。*nita* < *nuta* は前方唇音同化の結果に違いない。ではここで、『出雲風土記』と現代本土方言に見られる *nita* < *nuta* 「湿地」の例に戻ろう。『出雲風土記』によると、*nuta* は *nita* の後世の訛である(出雲風一六八・九一〇)。前に言及したように、*nita* < *nuta* という変化はそのままでは説明しづらいが、原形の **nita* は口蓋化により *nita* に変わり、同時に *nita* < *nuta* の前方唇音同化もあったので、*nuta* という形式は類推変化として解釈できるであろう。

この解釈を採用すれば、上代中央日本語では合成語の *opo-myita-kara* < *opo-nuta-kara* にしか残っていない日琉祖語の **nita* 「土」は、日本語より琉球諸言語においてよく保たれているという結論に至るであろう。

二、琉球祖語 **Ura* ~ **Uya* ~ **eya* ~ **ere* 「お前」

上代中央日本語の第二人称代名詞 *ore* (意禮)

琉球諸言語には「お前」という意味の第二人称代名詞として沖縄古語の *u:*、首里、喜如嘉、伊是名、瀬底、久米島 *ʔyaa:*、名瀬 *ʔya:*、古仁屋、茶花、湯湾、奥、辺野喜 *ʔura:*、黒島 *ʔuva:*、平良、東仲宗根、登野城 *vva* 等がある(平山一九六六:三〇三)。(平山一九六七:二四一)。(内間・新垣二〇〇〇:三七七)。

**Ura* < 古仁屋、茶花、湯湾、奥、辺野喜 *ʔura:*、黒島 *ʔuva:*、平良、東仲宗根、登野城 *vva* 等。

**Uya* < 首里、喜如嘉、伊是名、瀬底、久米島 *ʔyaa:*、名瀬 *ʔya*

Thorpe 氏は、**Ura* と **Uya* が琉球祖語では別々の第二人称代名詞であったと見なしている(Thorpe 1983: 220)が、私は **Uya* は **Ura* の比較的遅い反映形であると考える。Thorpe 氏は、現代首里方言の *ʔyaa* 「お前」は **Ura* からではなく、**Uya* からの反映形としているが、一五〇一年ごろの首里方言をハンブルで書いた資料には *ya:ra/Ura/* 「お前」がそのままの形で出ている(語音翻訳一オウ)。

**ereia* 「お前たち」 < 伊是名、瀬底、前島 *ʔitaa*、伊良部 *ʔii* (または、おがなど)

**Uga* 「お前—属格」 < 伊是名、伊江島 *uga* (尊敬語)、沖縄文語 *uga* (軽蔑語)、沖縄古語 *o-ga*。

**e-ga* 「お前—属格」 < 奥武 *iga*。

例:

沖縄古語

おがやへよりおわよりな

o-ga ya-te-yori owa-yori na

お前—属格 家—辺—尊敬 来(尊敬) —寄—連用形 助詞

お前の家から来たの(おもろ XIV九九八)

首里

Pari-ga yun-aa **ŷaa-N** yun-ee

彼—主格 読—状況接尾語 お前も読—命令形

彼が読んだら、お前も読め (沖縄語辞典 六九)

宮古

ŷaa-ga du basika-N

お前—主格 助詞 悪—終止形

お前が悪いぞ (野原一九八六:三七二)

vva ndza-ŋkai ga ik-i

お前 どこ—所格 助詞 行—終止形

お前どこ行くの (野原一九八六:三八二)

また、Thorpe 氏は、琉球祖語には *U~*e という第二人称代名詞があり、琉球祖語の指示代名詞の *Ure~*Uno に関連があるとの見解を示している(Thorpe 1982: 219-21)。しかし、Thorpe 氏は裏づけとなる細かい理論や証拠を述べていないため、疑問が残ると思う。もう一つの可能性について考えて見よう。

上代中央日本語の第二人称代名詞「意禮」/ore/ は単数形でも複数形でも使える。これは非常にめずらしい代名詞で、散文にしか見

られない。上代中央日本語の第一人称代名詞「わ・われ・あ・あれ」や上代中央日本語の第二人称代名詞「な・なれ」と同じ構造を持っていると思われるが、残念ながら、*o は上代中央日本語文献に出ていない。上代中央日本語の「われ」と「なれ」は「わ」と「な」に比べ、複数形として現れる傾向があるので (Vovin 2005: 220-21, 247-48)、上代中央日本語 ore も元来複数形ではないかと思われる。上代中央日本語の第二人称代名詞「意禮」/ore/ は明らかに軽蔑代名詞なので、和歌には見られない。

例:

意禮二字以音爲大國主神

ore [ni Nsi i on] OPO KUNI NUSI KAMIY NAR-I⁽⁵⁾

お前(二字音をもつて) 也 大國主神

お前は大國主神也(記 I:三〇オ)⁽⁶⁾

須佐能男尊が、自分の娘と駆け落ちした大國主に呼びかけた。

所作仕奉於大殿内者意禮此二字以音先入

OPO TÖNÖ-NÖ UTI-NI PA TUKUR-I-TUKAPEY-MATUR-

U PA ore [ni Nsi i on] MANTU IR-I

作り奉りし大殿内には貴様が先に入る

貴様がお作りした大殿内には貴様が先に入る(記 II:五ウ)

神武天皇の臣たちは、宮殿を作りそこに翼を仕掛け、神武天皇を殺そうとした人に命令した。

意禮熊曾建二人不伏無禮聞看而取殺意禮詔而遣

ore kumasō TAKYERU PUTA-RI MATUR-AP-ANS-U REI
NA-SI TŌ KYIKŌS-I-MYESI-TE ore TŌR-I-KŌRŌS-E TŌ
NŌTAMAP-YI-TE TUKAP-AS-ER-I

(大君) 貴様 熊曾 猛る 二人 奉らはず 禮なしと 聞こ
し召して 貴様 取り殺せと のたまひて つかはせり

(大君) 貴様熊曾猛る二人奉らはず禮なしと聞こし召して貴様
を取り殺せとのたまひてつかはせり(記 II : 三九オ)

倭猛尊は直前に自分が殺した熊曾長の弟、熊曾長について熊曾長に話した。

上代中央日本語の第二人称代名詞「意禮」(ore)と琉球祖語 *Ura
~*Uya~*eya~*ere「お前」を組み合わせると、日琉祖語の第二
人称代名詞の原形は *o~*e. だったと推定される。他の上代中央
日本語の第二人称代名詞の na~nare は、分布から考えても、日琉
祖語の第二人称代名詞ではありえない。

日琉祖語の第二人称代名詞 *o はアイヌ語の動詞呼応第二人称接
頭語 *o と驚くほど一致するが、これはただの類似性であるか、日
琉祖語とアイヌ語の接触の名残であるか、今の段階では決めがたい。

三、沖繩古語 ayo 「肝」とその語源

沖繩古語にはあよ「肝」、「心？」という言葉がある。私を知る限
りでは、その言葉は『おもろさうし』、「琉歌」と『混効験集』にし
か見られない。現代琉球諸言語には *ayo または *ayu 「肝」は見ら
れず、一般的に「きも」の反映形しかない。たとえば、湯湾、瀬底
kimu、古仁屋 kimo、伊是名 cimmu、前島、久米島 cimu、東仲宗
根、与那覇 kimu、登野城 kimu (内間・新垣二〇〇 : 三八九) など
である。上代中央日本語にも、上代東日本語にも、中古日本語にも、
現代本土の方言にも *ayo 「肝」は見られず、琉球語と同じように
「きも」の反映形しかない。以上に掲げた現代琉球諸言語の形式は
琉球祖語の *kimo を反映する。琉球祖語の *kimo と上代中央日本
語 kimmwo を組み合わせると、日琉祖語の *kimo が再構できる。
そして、次の二つの例を見れば、沖繩古語には「あよ」と「きも」
は間違いなく二重語だったと考えられる。

あちよくけにあれきもちよくとにあれ

ayo tiyo-ku ge ni-are kimo tiyo-ku da ni-are

肝 強ー連用形 実 連結詞 有ー命令形 肝 強ー連用形
本当 連結詞 有ー命令形

肝強く実にあれ、肝強く本当にあれ (おもろ I : 三三)⁽⁷⁾

あよ 肝の事なり

あよ 肝のことだ (混効 II : 二七⁽⁸⁾オ)

二重語が現れると、一つは借用語である可能性が非常に高くなる。「あよ」と「きも」の分布を見ると、確かに「あよ」の方は借用語とすると説明が容易である。では、「あよ」はどこから来たのだろうか。

私は元々沖縄古語の「あよ」がオーストロネシア祖語の *qaCay または *qaCay 「肝」に遡ると思っていた。オーストロネシア祖語の *C の現代オーストロネシア諸言語の反映形は非常に複雑である。最も頻繁に出る /l/ɛ/s/ の外にも /θ/、/c/、/y/、/e/、/o/、/ɲ/ がある (Tyon 1995:2:507)。最初の *q- はそのままではパイワン語にしか出ない。外の言語には時々 h- もっと頻繁には \emptyset - が出る。こうして見ていくと、次の発達も想像できるのではないだろうか。オーストロネシア祖語 *qaCay > *aBay > *aɖay ~ *ayay > 沖縄古語 ayo。しかし、大きな問題点が残っている。まず、沖縄古語には、この言葉以外に、オーストロネシア諸言語からの確実な借用語がない。そして、沖縄に地理的に一番近い台湾のオーストロネシア諸言語には /l/ɛ/c/ɛ/e/ の反映しかない。いずれにしても /y/ への発展はおかしい。

私の京都大学での発表の際、李相億先生から頂いたご指摘によって、もう一つの可能性が見えてきた。中世韓国語には $\cdot\cdot\cdot$ ay/「腸、胆、勇氣」という言葉がある。上代韓国語の資料にはこの言葉は見られないが、中世韓国語の $\cdot\cdot\cdot$ ay/「腸、胆、勇氣」には上声のアクセント記号「 $\cdot\cdot\cdot$ 」が付いているので、韓国祖語ではこの言葉の原形は二音節の形式 * $\cdot\cdot\cdot$ o だった事が明確である。中世韓国語文献からの例を見てみよう。

天魔 $\cdot\cdot\cdot$ ay : $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay

THYEN MA- $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay-r $\cdot\cdot\cdot$ or p $\cdot\cdot\cdot$ er- $\cdot\cdot\cdot$ e p $\cdot\cdot\cdot$ o $\cdot\cdot\cdot$ i-si-n-i

天魔—属格 胆—対格 落—不定形 失—尊敬—連体—名詞形

天魔が勇氣をなくすると (南明 下 : 四ウ)

$\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay $\cdot\cdot\cdot$ ay

nw $\cdot\cdot\cdot$ an p $\cdot\cdot\cdot$ u $\cdot\cdot\cdot$ hi-n s $\cdot\cdot\cdot$ ar $\cdot\cdot\cdot$ m-i $\cdot\cdot\cdot$ ay-r $\cdot\cdot\cdot$ or i $\cdot\cdot\cdot$ h-kwo nek-s-i $\cdot\cdot\cdot$ ps- $\cdot\cdot\cdot$ an-i

目 付—連体 人—主格 胆—対格 失—非終形 魂—主格

無—連体—名詞形

目を付けた人が勇氣を失い、魂がなくなると (金三 五 : 三

二)

四、琉球祖語 *peto 「海豚」と

上代中央日本語の iruka 「海豚」

琉球諸言語の中には「海豚」を意味する特別な言葉がある。たとえば、和泊 *ri'u*、井之 *ri'u*、首里 *ri'u*、川平 *pi'Qu* 「海豚」(Thorpe 1983: 279)。Thorpe 氏が引用した言葉以外にも、今帰仁 *pi'ri'u* 「海豚」(仲宗根一九八三: 四四五)と沖縄古語へと /*feto*/ 「海豚」(外間一九九五: 五九〇)がある。いずれも琉球祖語の *peto にさかのぼる。私を知る限り、上代中央日本語と現代日本本土方言には *peto の反映形はない。その代わり、上代中央日本語から「いるか」という言葉が見られる。上代中央日本語では「いるか」は訓仮名の「入鹿」として書かれてある。

例：

幸行于濱之時毀鼻入鹿魚既依一浦

濱に行くましし時に、毀れたる鼻のイルカ魚既に一浦に依れり

(記 II : 五四ウ)

南入海所在雑物入鹿・和爾・鰻・須受枳……

南の入海に在る雑の物は、イルカ、鰐さめ、ぼら、鱸……

(出雲風一四〇・五)

Pellard 氏によると、彼が研究した宮古方言ではイルカを *zzaka* *piu* とする(二〇〇七・一〇・二四電子メール)。*zzaka* は間違いなくイルカの宮古語の反映形であるが、それ以外に、私を知る限り、琉球諸言語にはイルカが使われた確証はなさそうである。さらに、宮古語の *zzaka* は *piu* と *peto と一緒に使われており、独立した言葉ではない。従って、琉球語祖語の中に *iruka が存在する証拠はない。結果として、*iruka を日本祖語の言葉として、*peto を琉球祖語の言葉として確立できるようであるが、いったいどうしてこの言葉にこんなに大きな違いがあるのかという疑問につきあたる。つまり、同じ日琉語族には同義語があるが、どちらが日琉祖語にさかのぼるのだろうか。先に掲げた沖縄古語の *ayo* 「肝」ほど、分布は簡単ではなく、どちらも祖語形として受けいられる可能性があるだろう。

村山氏は、北海道アイヌ語の *ri'ka* 「鯨の白肉(皮下脂肪層)⁽⁹⁾」、北千島アイヌ語の *ri'ka* 「鯨」、ドブトロトヴォルスキの『樺太アイヌ語辞典』の *ampe-ri'ka* 「鯨がいる」に注目した(村山一九七四: 二〇三)。残念ながら、村山氏の引用は完全でも、正確でもない。というのは、ドブトロトヴォルスキの『樺太アイヌ語辞典』では *ampe-ri'ka* (Dobrotvorskii 1875: II) だけではなく、樺太アイヌ語 *ri'ka* 「鯨」⁽⁹⁾ と千島アイヌ語 *ri'ka* 「鯨」も載せているのである (Dobrotvorskii

1875: 274)。知里(一九七六:一七六)を見ると、北海道でも樺太でも *tika* は「鯨の白肉(皮下脂肪層)」であるが、千島アイヌ語では、*tika* は「鯨」である(知里一九七六:一七六)。イルカは齒鯨類に属する小形種の哺乳類であるから、「鯨」から「イルカ」への意味変化は驚くことではない。また、『アイヌ語方言辞典』によると、樺太アイヌ語には *tika* 「海豚」という言葉が存在する可能性もある(服部一九六四:一八七)。この事を考慮に入れると、上代中央日本語の *iruka* 「海豚」はおそらくアイヌ語の *tika* の祖形で、アイヌ語の **iruka* > *tika* という変化は順行同化の結果であると思われる。以上の仮説が正しいとすれば、本土の *iruka* 「海豚」はアイヌ語からの借用語で、琉球祖語の **peto* は琉球祖語にしか保存されていなかった日琉祖語の言葉であると言えるだろう。

私の発表の際、Frellesvig 氏が琉球祖語の **peto* 「海豚」が上代中央日本語の比都自 */pyiuNsi/* 「羊」と同源語ではないか、という意見を出された。この可能性について考えてみよう。勿論、上代中央日本語の母音 */i/* と */u/* は日琉祖語の **e* と **o* に遡る事は可能である。しかし、ここでの問題は意味の変化と上代中央日本語の比都自 */pyiuNsi/* 「羊」の */Nsi/* が接尾語である証拠があるかどうかである⁽¹¹⁾。

本土の方言では上代中央日本語の比都自 */pyiuNsi/* 系の言葉はいつも */Nsi/* を含んでいる。しかし、琉球の八重山の鳩間方言に

は *pisi:* 「末」があり、八重山の石垣と竹富の方言には *pisi:* 「末」がある(宮良一九八〇:四九二)。これらの言葉は */Nsi/* がないので、上代中央日本語の比都自 */pyiuNsi/* 「羊」の */Nsi/* を接尾語として説明する事もできる。では、他には問題点がないだろうか。八重山の *pisi:* と *pisi:* 「末」の第一音節の */i/* は疑いなく日琉祖語の **e* に遡る事ができるが、第二音節の */i/* と */u/* は日琉祖語の **o* ではなく、**u* を反映する。また、八重山の *pisi:* と *pisi:* 「末」は、いうまでもなく、普通の動物である羊ではなく十二支の名前の一つを指しているため、借用語である可能性が非常に高いと思われる。

五、琉球祖語 **natuge* 「睫」と

上代中央日本語の *matukiy* 「睫」

中古日本語「ま^[つ]げ」LxH(名義抄高 八四オ一)も、「まつげ」HHL(名義抄観 仏中六九・四)⁽¹²⁾も、「まつげ」系の現代本土方言も、全て */ge/* で終わる。しかし、上代中央日本語の唯一つの音声表記は麻都奇 */matukiy/* である。

睐睫目旁毛倭言麻都奇(大般若経)⁽¹³⁾

睐睫は目の傍の毛なり。大和言葉は麻都奇なり。

「麻都奇」の読み方の定説は *matuNkey* (澤瀉一九六七:六八二)で

あるが、万葉仮名の「奇」の読み方は上代日本語文献ではいつも乙類 [kiy] で、乙類 [key] または [Nkey] の例はない。そして、祖語形が *matukuy (∨上代中央日本語 matukiy) であったか、あるいは *matuNkey (∨中古日本語 matuge) であったかという問題の解決には琉球諸言語の資料が不可欠である。それらの資料を見ると、和泊 macigi¹ 湯灣 mi-macigi¹ 井之 maziigi¹ 首里 maigi¹ 大浦 macigi (Thorpe 1983: 284) 東仲宗根 macigi (内間・新垣二〇〇〇: 四五二) は琉球祖語形 *matuge に遡る (Thorpe 1983: 284)。琉球祖語の *g は日琉祖語の *nk を反映し、琉球祖語の *e は日琉祖語の *e, *ay, *ia を反映する。日琉祖語の *e は中古日本語と現代日本語の /i/ になるので、残る可能性は *ay と *ia だけである。*ay は上代中央日本語の乙類 /ey/ になり、*ia は上代中央日本語の甲類 /ye/ になる。上で述べたように、上代中央日本語の唯一つの音声表記は *matuNkey ではなく、麻都奇 /matukiy/ であるから、上代中央日本語の母音が乙類 /ey/ であったという直接的な証拠にはならない。しかし、間接的な証拠はあると思う。まず、『日本書紀』では万葉仮名の「氣」は /key/ と /kiy/ とともに書いてある。『万葉集』と『続日本紀』では万葉仮名の「義」と「宜」は /Nkey/ と /Nkiy/ とともに書いてある。甲類 /kye/ ~ /Nkye/ と乙類 /kiy/ ~ /Nkiy/ の間にはそのような関係は見られない。また、乙類 /ey/ は甲類 /ye/ よりずっと頻繁である。従って、日琉祖語形はおそらく *matu-

kay であったのだろう。

語源の定説は目・つ・毛^けである (澤瀉一九六七: 六八二)。意味的には問題ないが、形態論上おかしな点があると思う。つまり、上代中央日本語麻都奇 /matukiy/ の他は、琉球祖語形 *matuge も、中古日本語 matuge も、日琉祖語形が無声子音 *k ではなく、子音群 *nk であることを示している。しかし、上代中央日本語 key 「毛」(ハ日琉祖語 *kay) は確かに無声子音 k から始まり、Nk から始まらない。とすると、日琉祖語形 *matunkay は *ma-tu-n-kay として分析されるべきである。その場合には、*n は属格の *no の省略である²としか考えられない。しかし、*ma-tu-n-kay の n も属・所格である。二つの属格が同じ合成語に入る事はできないはずである。

従って、日琉祖語形 *matunkay は *ma-tu-n-kay ∨ *ma-tu-na kay として分析すべきである。その *ma-tu-na kay の中では、na は属格で、*kay は「毛」なので、*matu は「目」でしかありえない。Whitman 氏が示したように、交替形と語幹形のある上代中央日本語の言葉は日琉祖語では *y で終わる (一九八五)。従って、上代中央日本語の mey ~ na- 「目」は日琉祖語形 *may に遡る。しかし、その *y はおそらく日琉祖語のどのような音節末歯音も反映しうる。合成語の中には古い形式がよく保存されているので、*ma-tu-na kay に見えるように、その *n は *i に遡るだろう。語幹末の *u の説明は困難であるが、日琉祖語ではこの言葉が二音節だったという可能

性は完全には無視できない。原始日琉祖語 *matu 「目」はオーストロアジア祖語 *mat とオーストロネシア祖語 *maCa 「目」によく似ており、おそらく偶然の一致ではなく、借用語の可能性が高い。

六、沖繩古語 gusuku 「拝所、城」とその語源

沖繩古語 gusuku 「^{うがんじゅ}拝所、城」の語源については色々な仮説があり、定説はまだない。琉球諸言語にはその言葉が gusuku ~ gusiku という形式で出ている(外間一九九五・二四)。中本正智が指摘したように、地名には gusuku だけではなく、suku しか出ない地名もある。たとえば、石垣の登野城はトノスクである(中本一九八三:一九二)。しかし、一般的に地名に基づく語源は信憑性が低い。いずれにしても、上の指摘を考慮に入れると、gusuku の gu- と -suku を説明しなければならぬ。gu- は漢語の接頭語「御」として説明したいとする誘惑にかられるかもしれないが、「御」は音声表記の場合には、沖繩古語では「ぐ」ではなく、常に「ご」である。たとえば、くにごしやん「国御杖、王さまの持つ笏しやく」(おもろ VIII 四〇三)などが示す通りである。-suku も、漢語の「宿」の借用語ではないかと想像したくなるが、gusuku の元来の意味は「城」または「御宿」ではなく、「^{うがんじゅ}拝所」らしい。では、この方向から考えて見よう。沖繩古代の拝所はきこる大君のような女神がシャーマニズム儀式を行っていた場所であった。だから、gusuku の意味は多分シャーマニズム儀式に関連があると考えていいだろう。本土の日本語に対応する言葉がないので、gusuku が琉球語の特別な発展でないとすれば、外の言語からの借用語である可能性を否定できないと思う。宗教の用語は借用されやすい事も事実である。

『おもろさうし』には音声表記の gusuku は二八二回出ているが、その内二八一回は「くすく」で、「ぐすく」は一回しか現れない(おもろ X:五一九)。いうまでもなく、『おもろさうし』の仮名書きには濁音の記号がほとんど使われていない事が理由であると思われる。現代琉球諸言語の証拠を考えると、いずれの表記も音声的には gusuku と見なした方がいいだろう。gusuku は gu- から始まるが、前に説明したように、琉球祖語の *gu は日琉祖語の *nk を反映する。勿論、日琉祖語にも琉球祖語にも元来語頭子音群がなかったので、その gu- は二次的なものに違いない。『おもろさうし』の中の gusuku の用例の分布を見ると、その九〇%は、体言あるいは形容詞の語幹に従っている。おそらく、gusuku は元来 *nu kusuku で、属格 + kusuku であったと思われる。琉球諸言語の、gani 「蟹」と garasu 「鳥」と同じ語頭濁音の起源である。従って、琉球祖語の *kusuku が再構できるだろう。

借用語の可能性に戻ると、中世韓国語には *kʷas / 「シャーマニズム儀式」という言葉がある。たとえば、

어미 下生:애산관갓만부림갓만

emi phyengsang-ay simpang kwus spwun curki-r soy

母 一生―所格 巫女 シャーマニズム儀式 だけ 楽―不定
時制連体形 ので

母は一生の内、巫女のシャーマニズム儀式だけを楽しんだので
(月釋Ⅲ:六八)⁽¹⁴⁾

中世韓国語・ㅈ/kwūs/「シャーマニズム儀式」は古代韓国語資料には見られないが、古代韓国語資料は非常に断片的なので、驚くべきことではない。また、韓国祖語ではこの言葉は二音節の *kwūsū であった可能性もある。

中世韓国語には・ㅈ/kwôt/「場所」という言葉もある。たとえば、

·이·관·의·고·대

i kwôt iyé kwôt-ay

この 場所 あの 場所―所格

この場所で、あの場所で(龍歌二六)⁽¹⁵⁾

中世韓国語の·ㅈ/kwūs/「シャーマニズム儀式」と同じく、古代韓国語資料には見られないが、上代中央日本語の *wōo 「場所」

は古代韓国語からの借用語らしいので、この言葉は中世韓国語・ㅈ/kwūs/「シャーマニズム儀式」と違い、一音節の *kwôt であつたと思われる。借用語が琉球祖語に入ると、音節末子音が当然なくなるので、琉球祖語の *kusuku 「拜所」^{うがひま}は古代韓国語の *kwūs [u] kwôt 「シャーマニズム儀式の場所」からの借用語である可能性は非常に高いと思う。

琉球祖語は、おそらく九州または西本州から九〇〇年代ごろ琉球に入り始めた (Serafim 2003: 474)。上代西日本には上代韓国言語とその文化の影響はとても強かったので、このような借用語があつても不思議ではない。

七、沖繩古語 Siyori 「首里」とその語源

「首里」という地名は『おもろさうし』に仮名書きの「しより」としては二一九回現れるが、漢字書きの「首里」としては四三回しか出ていない。『おもろさうし』は殆ど全部仮名書きであるから、これは驚くべきことではない。しかし、この地名には不思議な点がいくつかある。まず、「しゆり」という仮名書きが全く見られないということである。なぜだろうか。

琉球祖語の *u と *o は、沖繩古語では現代首里語のようにすでに混同していたという定説があるが、この説には非常に確かな反対証拠がある。たとえば、ハングルで書かれた沖繩古語資料の、次の

表1 琉球祖語*oの沖縄古語と現代首里語での反映形

意味	沖縄古語 (ハングルとローマ字)	現代首里語
この	고노 kwonwo 語音翻訳 2オ	kunu
人	피초 phicywo 語音翻訳 2オ	Qcu
肝	기모 kimwo 語音翻訳 2ウ	cimu
多い	오부 wopwu 語音翻訳 1ウ	?uhu 「大」

例を表1にあげよう。

最後の例を見ると、*o √ /u/ という変化がもう始まっている事は分かるが、いうまでもなく、一般的ではない。『おもろさうし』にも対格助詞はいっも「よ」(ハ・*yo)として書かれてある。「ゆ」の対格助詞の形式は「琉歌」以後しか姿を見せない。従って、『おもろさうし』でのウ段の仮名とオ段の仮名の使い方はばらばらではなく、少なくともある程度まで古いウ・オ区別を守っていると思われる。

そして、「首」の漢字の現代中国語の読み方は勿論/shou³/であるが、中世中国語の読み方は /syuwX/ である。だから、「首里」が中国語の首里の借用語であったとすれば、それは多分「しより」ではなく、「しゆり」と書かれただろう。「主」という漢字の中世中国語の読み方は /syuX/ であるが、『おもろさうし』でのその仮名書きは同じく「しゆ」である。

つまり、「首里」という漢字は民間語源または当て字だと思われる。その語源を明らかにする前に、もう一つの大切な現象について言及したいと思う。沖縄古語の /s/ は *s/ にも *w/ にも遡るこ

とができる。上でも説明したように、沖縄古語の対格助詞「よ」は *wo に遡る。もう一つの例をあげると、沖縄古語 iyo 「魚」は *iwo に遡る。だから、「しより」も *siwori を反映する可能性がある。

「首里」はやはり統一琉球王国の首都であった。東アジアの伝統では、首都の名前を使わずに、よく「首都」としてのみ呼ばれている。たとえば、奈良時代には、奈良を「みやこ」とだけ呼んだ例は上代日本文献に沢山ある。たとえば、

美夜故邊尔由可牟船毛我可里許母能美太礼豆於毛布許登都導夜
良牟
み¹やこ¹へ¹にゆかむふねも¹がかりこ²も²のみ³だれておも¹

ふ³こ²と²つげ²やらむ

myiyakwo pyc-ni yuk-am-u pune mwonka kar-i-komō-nō
myiNtare-te omwop-u kōtō tuNkey-yar-am-u

京辺に 行―推量―連体形 船 希望助詞 刈―名詞形―麁―
比較格 乱れ(連用形)―不終形 思―連体形 言 告げ(連
用形)―遣―推量―終止形

京辺に行かむ船もが刈り麁の乱れて思ふ事告げやらむ(万 XV
三六四〇)⁽¹⁶⁾

平安時代にも平安京を「みやこ」と呼んだ例は少なくない。現代韓国(朝鮮/Sewul)になった中世韓国語の syəwɯr も元来「京」の意味を持っていた。たとえば、

・ ᄃᆞᆫ ᄃᆞᆫ ᄃᆞᆫ ᄃᆞᆫ ᄃᆞᆫ ᄃᆞᆫ ᄃᆞᆫ

syəwɯr-s kuyɣɛr-ur ar-ssɔy

京—属格 事情—対格 知—不定時制連体形 ので

京の事情を知ったので(龍歌三五)

この句の syəwɯr 「京」はソウル市に関係はなく、中国の首都を表す。

私の意見では、沖縄古語の「しより」(\wedge *siwori)は韓国語の syəwɯr 「京」からの借用語である可能性があると思う。それでも、不明なところが残っている。一番大きな問題は、中世韓国語の syəwɯr の第一の音節 /syə/ は上声のアクセントであるから /syə/ は韓国祖語の二音節の連続であった。しかし、この二音節の連続がいつころ一音節に縮んだかまだ説明が困難なのである。いずれにしても、これは偶然の類似ではないと思う。

結論

結論として次の二つの点を強調したい。

- (イ) 琉球諸言語の資料を使わなければ、日琉祖語の再構は不可能である。上代中央日本語と琉球諸言語の関係は、ラテン語がロマンス語族の祖語であるように単純明快であると考えてはならない。つまり、上代中央日本語は日琉諸言語の祖語ではないのである。日琉諸言語の中で時間的に最も古い文献を持つ上代中央日本語は琉球祖語と比べたら改新は少なからずある。この事実については、服部氏が少なくとも三〇年前に明確にしている(一九七八—七九)が、残念ながら日本の本土の国語学者の大部分とアメリカ・西欧の言語学者の多くが再構を行う際に琉球祖語のデータを考慮に入れない傾向がある(たとえば Miller 1996, Unger 2008 参照)。本稿では日琉諸言語の歴史の研究における琉球諸言語と琉球祖語の重要性をもう一度強調する目的で、それを支持する新しい資料を導入してみた。
- (ロ) また、本稿では、上代日本語と現代日本語の本土方言には存在しない韓国語の要素が琉球諸言語に表れていることを示そうとした。沖縄古語 ayo 「肝」、gusuku 「拝所」、Siyori 「首里」に因する私の語源仮説が正しければ、ある上代韓国語の方言と琉球祖語の間に接点があったことを明示する事になるであろう。そ

これらの接点はどの地方で起こったのだろうか。Serafim 氏は最近の論文で琉球祖語はどこから琉球列島に入ったかについて三つの仮説を論じている。この論文によると、九州の南、九州の西北（特に長崎県）、そして本州の最西端・山口県が可能であると考えられる出発点だという。Serafim 氏は最後の可能性が最も信憑性が高いと考えているようだ(二〇〇三)。琉球祖語・上代韓国語の接点は九州の南ではありえないだろう。長崎県の地方もあまり可能性は高くない。九州の東北ないし山口県の地方である可能性が高い。

資料略称

〔日本文献〕

出雲風

出雲風土記 七三三年

記

古事記 七二二年

大般若経

石山寺本大般若経音義 平安時代初期前

万

万葉集 七五九年以後七八五以前

名義抄観

類聚名義抄 一〇八一年（観智院本）

名義抄高

類聚名義抄 一〇八一年（高山寺本）

〔琉球文献〕

おもろ

おもろさうし 一六一七世紀

混効

混効験集 一七一一年(?)

〔韓国文献〕

金三

金剛經三家解 一四八二年

南明

南明泉繼頌諺解 一四八二年

語音翻訳

海東諸国紀附録語音翻訳 一五〇一年

龍歌

龍飛御天歌 一四四三年

月釋

月印釋譜 一四五九年

注

(1) 日琉祖語の *と *o は、琉球祖語では常に保存され、上代東国日本語では多くの場合には保存され、上代中央日本語ではある条件下以外で大抵 /i/ と /e/ になった(服部四郎一九七六、一九七八・七九)。(早田一九九八)。(Serafim 1999a, 1996b, 2008) (日野二〇〇三)。(Miyake 2003b)。(Fellesvig & Whitman 2004, 2008)。

(2) 『出雲風土記』からの引用は『日本古典文学大系』(第二巻秋本 一九五八)による。

(3) nia は岩手県、熊本県、nora は大阪府、奈良県、茨城県、長野県、nuta は東京都、埼玉県、長野県、愛知県、奈良県、大阪府、和歌山県、島根県、高知県、熊本県に見られる。更に、福島県では neda も見られる(徳川・佐藤一九八九:II、一八一三)。

(4) 『古事記』からの引用は(高木・富山一九七四)による。

(5) 大文字は音声表意記ではない部分を示す。

- (6) 『古事記』からの引用は『古事記大成』（高木・富山一九七四）による。
- (7) 『おもろさうし』からの引用は（外間二〇〇〇）による。
- (8) 『混効験集』からの引用は（外間一九八一）による。
- (9) （知里一九七六・一七六）を引用した。
- (10) 実際は *ampe rika* 「鯨がいる」ではなく、「いるものは、鯨 [だ]」で、正しい綴り方は *an Pe rika* 「いるもの、鯨」だ。
- (11) Martin 氏の意見では、上代中央日本語の比都自 (*pirinzi*) は日琉祖語の **pi-ru-n-zi* 「髭の牛」に遡れる（一九八七：四一一）が、次に出る「まつげ」の語源と同じように、二つの属格が使用されるという問題がある。
- (12) 『類聚名義抄』からの引用は（望月一九七四）による。
- (13) 石山寺本『大般若経音義』からの引用は（澤瀉久孝一九六七）による。
- (14) 『月印釋譜』からの引用は『数学古語辞典』（南一九九七）による。
- (15) 「龍飛御天歌」からの引用は（朝鮮語学研究会一九三四）と（*Hyakunin Isshu* 二〇〇七）による。
- (16) 『万葉集』からの引用は（澤瀉久孝一九八四）による。

参考文献

- 秋本吉郎（編）一九五八、『風土記・日本古典文学大系2』東京：岩波書店。
- 内間直仁・新垣公彌子二〇〇〇、『沖繩北部・南部方言の記述的研究』

東京：風間書房。

澤瀉久孝（代表）一九六七、『時代別国語大辞典 上代編』、東京：三省堂。

澤瀉久孝一九八四、『萬葉集注釈』巻第十五、東京：中央公論社。

高木市之助・富山民蔵（共編）一九五八、『古事記総索引本文編・総索引編』『古事記大成』第七・八巻、東京：平凡社。

知里真志保一九七六、『分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』知里真志保著作集、別巻1、東京：平凡社。

徳川宗賢・佐藤亮一（共編）一九八九、『日本方言大辞典』上・下・別巻。

仲宗根政善一九八三、『沖繩今帰仁方言辞典』東京：角川書店。

中本正智一九八三、『琉球語彙史の研究』東京：三一書房。

野原三義一九八六、『琉球方言助詞の研究』東京：武蔵野書院。

服部四郎（編）一九六四、『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店。

服部四郎一九七六、『琉球方言と本土方言』『沖繩学の黎明 伊波普猷生誕百年記念誌』、伊波普猷生誕百年記念会（編）、七五五頁。

服部四郎一九七八・七九、『日本祖語について』、『言語』連載一・二二。

早田輝洋一九九八、『上代日本語の音節構造とオ列甲乙の別』、『音声研究』二・二五・三三。

日野資成二〇〇三、『日本祖語の母音体系—上代東国方言資料による再構』、『日本語系統論の現在 / Perspectives on the Origins of the Japanese Language』長田俊樹、アレキサンダー・ボヒン（ヴォウイン）共編。京都：国際日本文化研究センター、一八七—二〇六頁。

平山輝男一九六六、『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院。

平山輝男一九六六、『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院。

- 平山輝男一九六七、『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院。
 編纂委員会編、一九九五、『沖繩古語大辞典』東京：角川書店。
 外間守善(編)一九七〇、『混効験集。校本と研究』東京：角川書店。
 外間守善校注二〇〇〇、『おもろそうし』上・下、岩波文庫、東京：
 岩波書店。
 宮良當壯一九八〇、『八重山語彙 甲篇』宮良當壯全集第8巻、東京
 ・第一書房。
 村山七郎一九七四、『日本語の語源』東京：弘文堂。
 望月郁子(編)一九七四、『類聚名義抄四種声点付和訓集成』東京：笠間
 書院。
 南廣祐(編)一九九七、『教学古語辞典』教学社。
 손근네 二〇〇七 『용의역전기』한글문화사。
 朝鮮語学研究会(編)一九三四、『龍飛御天歌』2、『正音』第八号、
 六四五-六四頁。
 Dobrovorskii, Mikhail M. 1875. *Ainskoro-russkii slovar'*. Kazan': Kazan'
 University.
 Frellesvig, Bjarke & John Whitman 2004. "The vowels of Proto-
 Japanese." *Japanese Language and Literature* 38: 281-99.
 Frellesvig, Bjarke & John Whitman 2008. "Evidence for seven vowels in
 proto-Japanese." In: *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Bjarke
 Frellesvig, John Whitman (eds.). Amsterdam: John Benjamins. 2008,
 pp. 15-41.

- Martin, Samuel E. 1987. *The Japanese Language Through Time*. New
 Haven & London: Yale University Press.
 Miller, Roy A. 1996. *Languages and history: Japanese, Korean, and
 Altaic*. Bangkok: White Orchid Press.
 Miyake, Marc H. 2003a. *Old Japanese: a phonetic reconstruction*.
 London & New York: Routledge/Curzon.
 Miyake, Marc H. 2003b. "Philological evidence for *e and *o in Pre-Old
 Japanese." *Diachronica* 20.1: 83-137.
 Serafim, Leon A. 1999a. "Why Proto-Japonic had at least six, not four
 vowels." Presentation given at the University of Hawaii'i at Mānoa
 Linguistics Department Tuesday Seminar.
 Serafim, Leon 1999b. "Reflexes of Proto-Koreo-Japonic Mid Vowels in
 Japonic and Korean." Paper presented at International Conference
 on Historical Linguistics XIV (Copenhagen), Workshop on Korean-
 Japanese Comparative Linguistics.
 Serafim, Leon A. 2003. "When and From Where Did Japonic Language
 Enter the Ryukyus?" In: *ハナキサンター・ホユン／長田俊樹* (共
 編) 二〇〇三 『日本語系統論の現在』京都：国際日本文化研究セ
 ンター。四六三-七七頁。
 Serafim, Leon A. 2008. "The uses of Ryukyuan in understanding
 Japanese language history." In: *Proto-Japanese: Issues and Pros-
 pects*. Bjarke Frellesvig, John Whitman (eds.). Amsterdam: John
 Benjamins. 2008, pp. 79-99.
 Thorpe, Maner L. 1983. *Ryukyuan Language History*. University of

- South California Unpublished Ph.D. dissertation.
- Tyron, Darrell T. (ed.) 1995. *Comparative Austronesian Dictionary*. Part 2. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Unger, J. Marshall 2008. "Early Japanese lexical strata and the allophones of /g/." In: *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Bjarke Frellesvig, John Whitman (eds.). Amsterdam: John Benjamins: 2008, pp. 43-53.
- Vovin, Alexander 1993. *A Reconstruction of Proto-Ainu*. Leiden: E. J. Brill.
- Vovin, Alexander 2005a. "The End of the Altaic Controversy," *Central Asiatic Journal* 49.1: 71-132.
- Vovin, Alexander 2005b. *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese*. part 1: *Introduction, Writing System and Phonology; Lexicon, Nominals*. XIX+412 pp., Folkestone: Global Oriental Press (UK).
- Vovin, Alexander 2007a. "Once Again on Doublets in Western Old Japanese." In: Frellesvig, Bjarke, Shibatani, Masayoshi & Smith, John Charles (eds.) *Current Issues in the History and Structure of Japanese*. Tokyo: Kurozio Publishers, pp. 351-73.
- Vovin, Alexander 2007b. "Korean Loanwords in Jurchen and Manchu." *알타이 학보*. 17: 73-84.
- Vovin, Alexander 2007c. "Cin-Han and Silla words in Chinese transcription." *Linguistic Promenades: Kim Chin-Wu 先生退職記念論文集 李相億(編)*。Seoul: Hallim.
- Vovin, Alexander 2008. "Proto-Japonic beyond the accent system." In: *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Bjarke Frellesvig, John Whitman (eds.). Amsterdam: John Benjamins: 2008, pp. 141-56.
- Vovin, Alexander 2009a. *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese*. part 2: *Adjectives, Verbs, Adverbs, Conjunctions, Particles, Postpositions*. XXVIII+988 pp., Folkestone: Global Oriental Press (UK).
- Vovin, Alexander 2009b (forthcoming). *Koreo-Japonica: A critical review of the language relationship*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Vovin, Alexander 2009c (forthcoming). "Korean and Japonic: Areal or Genetic Relationship?" *알타이 학보*. 19.
- Whitman, John B. 1985. *The Phonological Basis for the Comparison of Japanese and Korean*. Unpublished Harvard University Ph.D. dissertation.

この論文は二〇〇八年四月一七日京都大学言語学部での発表と二〇〇八年七月七日琉球大学での講演に基づいて書き直して、増補している。発表後、非常に役立つコメントを下られた田窪行則先生、李相億先生、吉田豊先生、Bjarke Frellesvigさん、Janick Wronaさん並びに山崎瑤子さんにご感謝を申し上げます。